

月例会ダイジェスト【83】

現場で積み重ねた実践活動を論文にまとめる、あるいは学会で発表したという経験はないだろうか。このようなアウトプットは会社への具体的なレポートになるうえ、ほかの研究者も貴重な事例として参照できる。5月の月例会は「現場の実践報告をどう発信する?」というテーマで、実践報告のまとめ方や発表のノウハウを経験者が紹介し、実践報告の意義について議論した。コーディネーターは福田洋氏(順天堂大学)、金森悟氏(帝京大学大学院)、江口泰正氏(産業医科大学)の3名。

一番手として福田氏が登場。「学会における実践報告のススメとコツ」というテーマで発表した。

まず「学会には、さまざまな目的があつていい。研究者以外の人も参加することで、学会の価値が増す」と学会の捉え方を述べ、「職域の実践者が行くべき学会」として国際学会と連携しているいくつかの学会を紹介した。

また、実践報告のコツとして「必ずしも研究報告のように統計学を深く理解していたり、先行研究を調べたりする必要はない(出すことを怖がらない)」「内容を詰め込みすぎず、最も主張したいことをシンプルに発表する(欲張らない)」「実践報告には限界がある。活動がうまくいったからといって、それで結論付けができるとは限らない(決めつけない)」を提示。そして「人が真似したいと思えるポイントを、しっかり書くこと。その際に“なぜ、うまくできたのか”といった裏話を入れると、多くの企業が参考にできる」と語った。最後に「学会は、研究者と企業側の実践者が出会う場所。そこから両者のコラボが始まるのが理想で、皆さんの実践報告はそのための“種”になる」と、積極的な発表を促した。

その後、金森氏が「現場のデータを使った学会発表のポイント」というテーマで登場。冒頭では、学会発表を始める前に立ちはだかる大きな壁として「企業データの公表」と「研究スキル」を挙げた。前者については、従業員のデータを社外に出すことに上司等が難色を示すケースに対し「企業イメージを損ねる可能性のあるデータは極力避け、“禁煙活動で従業員の喫煙率が低下した”などポジティブなものを扱う」と戦略を例示。後者では「身近な教員や研究者がいれば相談する。体系的に学びたい場合は、大学院や帝京の産業保健高度専門職の大学院プログラム等の受講を検討するのもよい」と述べた。

次に「保健活動と研究は密接に関わっている」と、保健活動と研究との関連性について説明した。さらに、事例を紹介する際に押さえておくべき文脈のポイントとして「研究の4部構成(背景・緒言/方法/結果/考察)」について解説を行

い、その具体例として自身の実践報告を紹介した。金森氏は「勇気をもって、最初の一步を踏み出してほしい」と参加者にエールを送り、発表を終えた。

江口氏のテーマは「学会発表までの流れ:実際の学術大会を例に」。学会発表までの流れを「資料作成」「手続き」「当日の流れ」と3つのフェーズに分け、自身の経験談も交えて説明した。例えば「手続き」の中に含まれる「発表練習」では「あれも、これも発表したい」と思うと時間がオーバーするし、早口にもなってしまう。発表は言いたいことの半分に絞り、ゆっくり喋る」と助言。また、モチベーションを高めるために「発表終了後のご褒美を決めておく(報酬バンドリング)」といったことも勧めた。さらに「当日の流れ」では「慣れていない人は、発表前のセッションから会場入りして場の雰囲気慣れしておく」「ほかの人の発表を見て、イメージトレーニングしておく」など初心者への心構えも示した。ラストでは、11月に開催される日本ヘルスプロモーション学会と、日本産業看護学会の合同学術集会/大会を告知。「学会参加の第一の目的は発表ではあるが、出合いを通じて意見交換をしたり、新しい研究のこゝろを知ったりするなど、そこから(人脈や見識)を広げていくことが自分の研究の主たる手法。学会での出合いを、ぜひ利用してほしい」とまとめた。

後半はグループに分かれ、発表で得られたことや、喜び・達成感などを共有。また、参加者から出てきた質問や、不安な点についてディスカッションした。

まとめの発表では「学会など公の場で社内のデータを見せることが会社から認められず、なかなか発表ができない」など、発表に際しての“壁”を課題に挙げる声は複数あった。それに対し、福田氏は「“会社のいい活動を世の中に知らしめたい”という話なので、上司のOKを取る雰囲気づくりがまず大事。上司を説得しづらいのであれば、産業医から説得してもらう方法もある」とアドバイスした。また、「成果より活動内容をアピールするとのよいのではないか」といった提言に対し「ネガティブスタディーであっても、どのような活動をしたのか、そのプロセスはヘルスプロモーションでは重要」と返した。

最後は「ハードルが高いと感じる人が多いかもしれないが、きれいな結果が出なくても、少しでも魅力的なプロセスがあれば、たとえ失敗例でも役に立つ」(金森氏)「さんぽ会もそうだが、このような学べる場に継続的に参加して発表の練習をしたり、先輩方に質問したりするなどして、現場の活動を外部に発信するという姿勢を大事にしてほしい」(福田氏)とコーディネーターがコメントして、月例会が終了した。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp>
- FB ページ <http://www.facebook.com/sanpokai>